

氏名（本籍）	中村 珍 晴（兵庫県）
学位の種類	博士（スポーツ科学）
学位記番号	甲 第 36 号
学位授与日	令和2（2020）年9月15日
学位授与の要件	大阪体育大学大学院学位規程第4条第1項該当
研究科名	スポーツ科学研究科（博士後期課程）スポーツ科学専攻
論文題目	スポーツ傷害における心的外傷後成長に関する研究
審査委員	主 査 教 授 土 屋 裕 睦 副 査 教 授 前 島 悦 子 教 授 富 山 浩 三

## 論文内容の要旨

スポーツ傷害は、単に身体的な傷害を与えるだけでなく、アスリートとしてのアイデンティティなど心理的な喪失体験となることもあり、選手の心に傷跡を残す危険因子として捉えることができる（Evans, 2012）。一方で、受傷後のアスリートの心理的成長に関する研究も国内外で報告されている（McDonald and Hardy, 1990; 豊田, 2006）。このように、アスリートにとって受傷は、様々な心理的問題を呈するストレスフルな体験または危機となるが故に、自己の成長を促す要因になる可能性があると考えられている。

困難な出来事からの成長を表す概念として、心的外傷後成長（Posttraumatic Growth; 以下 PTG と記載）がある。PTG は、Tedeschi and Calhoun（1996）によると危機的な出来事や困難な経験における精神的なもがき・闘いの結果生じるポジティブな心理的変容体験と定義されている。PTG で取り扱うトラウマは、ストレス度の高い衝撃的な出来事とされており、心的外傷後ストレス障害（Posttraumatic Stress Disorder）を発生させるような出来事（自然災害、闘病、事故や怪我、戦争体験など）に限定していない

点が特徴である (Tedeschi and Calhoun, 2004). アスリートにとって受傷は、様々な心理的問題を呈するストレス度の高い危機的体験となり得るため、受傷をきっかけに PTG を経験する者もいると考えられ、それを支持する研究報告もある (中村・荒木, 2016). そこで本研究では、PTG の理論的枠組みを用いて、受傷アスリートの心理サポートをする上での有益な基礎的知見を構築するための横断的・縦断的な調査による検討を目的とした。

まず研究 1 では、スポーツ傷害に特化した PTG 尺度 (PTG Scale after an Athletic Injury: 以下 PTGS-AI と略す) の開発とその尺度を用いて横断的調査を実施した。大学生アスリート 266 名の内、高ストレスを示す基準 (SUD の回答が 6 以上) を満たす 212 名 (男性 135 名, 女性 77 名) を分析対象とした。探索的因子分析の結果、PTGS-AI において 4 因子 16 項目が抽出された。因子名は、チームメンバーとの関係性、競技者としての心理的強さ、新たな可能性への取り組み、競技に向けた準備力の向上であった。また内的整合性により信頼性が確認され、日本語版心的外傷後成長尺度との相関から、基準関連妥当性が認められた。次に PTG の生起に影響を及ぼすとされている中核的信念の揺らぎと意図的熟考との関連では、PTGS-AI の各下位尺度において異なる結果が得られた。そして、受傷時の主観的衝撃度の得点と復帰までの期間が PTGS-AI に与える関連を検討した二要因分散分析の結果、交互作用が有意であった。以上の結果から、PTGS-AI は、スポーツ傷害に特化した PTG を測定する上で有効な心理指標であり、中核的信念の揺らぎと意図的熟考が PTGS-AI の各下位尺度で異なる関係性のあることが示唆された。そして、受傷時の衝撃度と復帰までの期間が PTG の生起に関係することが明らかとなった。

次に研究 2 では、合計 3 回に渡る縦断的調査のデータを用いて、性格特性のハーディネスとソーシャルサポートがスポーツ傷害に特化した PTG に及ぼす影響について検討した。対象者はコンタクトスポーツの競技者であり、全国大会出場相当の競技レベルである大学生アスリート 235 人 (男性 168 名, 女性 67 名) であった。ハーディネスとソーシャルサポートの下位因子 (道具・情動的サポート, 情緒・所属的サポート, 評価的サポート) を独立変数とし、PTGS-AI の下位因子を従属変数とする階層的重回帰分析の結果、まずソーシャルサポートの内、評価的サポートのみが正の関係性があった。またすべての因子においてハーディネスの正の関係性が認められた。次にチームメンバーとの関係性と競技者としての心理的強さではハーディネスと評価的サポートの交互作用が確認された。具体的には、ハーディネスの傾向が高く、復帰にかけてチームメンバーから評価的サポートを受けていると PTG の得点が高くなっていた。またハーディネスの傾向が低くても評価的サポートを受けていると PTG の得点が高くなることが確認された。つまり、高ストレス下で健康を保てるような性格の傾向が低いアスリートであっても、受傷から復帰にかけて周囲から受け入れてもらえているという実感があることで PTG を経験できる可能性があると考えられる。

以上をまとめると、スポーツ傷害をきっかけとした PTG は、チームメンバーとの関係性が肯定的に変化することや心理的強さを獲得することに加え、プレースタイルや練習への取り組みの変化など競技者としての成長が含まれていることが明らかとなった。さらに、受傷後に評価的サポートを受けることができる人間関係の構築をすることが心理的成長に繋がるという可能性が示唆された。

## 審査結果の要旨

### (論文審査)

本研究は、スポーツ傷害をきっかけとした心的外傷後成長(Posttraumatic Growth, 以下 PTG と記載)のメカニズムを明らかにしようとしたものである。研究1では、体育系大学の学生266名(男性168名, 女性98名)を対象に質問紙調査を行い、スポーツ傷害に特化したPTG尺度(PTG Scale after an Athletic Injury, 以下 PTGS-AI と記載)の開発を行った。探索的因子分析を施した結果、PTGS-AIにおいて4因子16項目が抽出され、信頼性ならびに構成概念も妥当であることが確認された。特に、受傷時の主観的衝撃度の得点と復帰までの期間とPTG得点との関連を検討した結果、復帰までの期間が短くても衝撃度が高い、あるいは、受傷時の衝撃度が低くても復帰までの期間が長いとPTGが高くなることが分かった。次に研究2では、合計3回に渡る縦断的調査のデータを用いて、性格特性であるハーディネスと環境要因であるソーシャルサポートがスポーツ傷害に特化したPTGに及ぼす影響について検討した。全国大会出場相当の競技レベルである大学生アスリート235人(男性168名, 女性67名)を対象に質問紙調査を行い、得られたデータについて階層的重回帰分析を行った結果、ハーディネスの傾向が高く、復帰にかけてチームメンバーから評価的サポートを受けているとPTG得点が高くなり、ハーディネスの傾向が低くても評価的サポートを受けているとPTGの得点の高くなることが確認された。

以上から、PTGS-AIの開発を通じてスポーツ傷害をきっかけとしたPTGの特徴を検討した結果、チームメンバーとの関係性の変化に加え、プレースタイルや練習への取り組みの変化など競技者としての成長を含んでいることが明らかとなった。さらに縦断的な検討からは、受傷後に評価的サポートを受けることができる人間関係の構築をすることが心理的成長に繋がるという可能性が示唆された。

論文審査の結果、スポーツ傷害に特化したPTG尺度を開発し我が国の心理学研究においてPTGの新たな研究領域を開拓したこと、特に個人の性格要因と環境要因であるソーシャルサポートがPTGに与える影響を縦断的に検討し、心理サポートの在り方に有益な知見を得たことが評価された。

### (最終試験)

提出論文をもとに、関連する事柄および発表会での質疑に対する応答の内容を中心に、口頭試問を行った。具体的には、①心理的成長とはどのような現象か、PTG尺度はそれを正しく測定できているのか、また従来のPTG尺度と今回作成したスポーツ傷害に特化したPTG尺度(PTGS-AI)との違いは何か、②研究の方法は妥当か、具体的には大学生アスリートを対象とした理由、対照群として競技復帰しなかったアスリートとの比較が必要ではないか、③その他研究の意義や限界・今後の展望を中心に質問した。

その結果、①については、近接概念であるレジリエンスとの異同を論じながら、PTGの先行研究に基づき本研究でも心理的成長をPTG概念から操作的に定義しており、それに基づいてアスリートに特徴的な項目で構成されるPTGS-AIが開発されたこと、またPTG研究では、きっかけとなる出来事の客観的な重大さだけでなく、その出来事によって本人がどの程度影響を受けたのかという主観性を考慮する必要があると回答した。また②については、大学生アスリートの特徴および研究対象としての意義について述べた後、研究2では因果関連性を検討

するため、横断的な比較ではなく縦断的な調査に基づく階層的重回帰分析を用いた多変量解析を実施しており、18ヶ月に及ぶ調査を通じて交絡要因をできる限り統制するために多変量解析を用いたと回答した。

そのほか、研究の意義、限界と課題についての質問にも的確な回答があり、提出された論文においても発表会および口頭試問における質疑を反映して適切に修正がなされていることを確認した。また関連する事項についても十分な回答がなされた。以上から、博士の学位授与の基準を満たしていると判断されたので、合格と判定した。